



## 会長挨拶

峰ヶ丘同窓会会長

宇田 靖 (昭45化卒)

峰ヶ丘同窓会会員の皆様、お元気で過ごしてはいかがでしょうか。

昨年11月、農学部創立100周年の記念式典並びに祝賀会が盛大に開催されました。記念式典の物故者追悼のところで申し上げましたが、この100年の間、高等農林学校及び農林専門学校の卒業者は併せて3,240余名、新制農学部の卒業者は16,460余名を数え、2,600名を超す大学院修士課程、博士課程修了者を合わせて2万2千名を超える同窓生が峰ヶ丘から巣立っていきました。やはり、創立100周年という年月の重みは大きく、峰ヶ丘同窓会では本年度の事業計画の中に100周年関連事業として、記念碑の設置と記念植樹（候補樹木：日光紅姫桜）、そして大学が計画中の旧講堂、旧高農図書館書庫の石蔵を含む、ヒストリカルゾーン整備事業に協力することを盛り込んだところであります。この事業計画は去る6月15日に開催された理事会におきましてご承認をいただきましたので、早速、記念碑の

設置事業と記念植樹に取り掛かることとしています。また、昨年まで継続してきました学生への経済的支援として、附属農場や生協食堂と協力して安価で美味しい昼食の提供などの学生支援を行うことにしています。

峰ヶ丘同窓会の会員同士のつながりを維持し築いていく上で会員名簿は大変大きな役割を持っていますが、冊子体の形としては昨年9月に発行された令和5年版が最後になりました。今後は、電子媒体での管理に移りますが、具体的な運用をどうするか、いろいろな課題に直面しています。まずは、会員の皆様には住所などの連絡先の変更の際には、できるだけ速やかに同窓会事務局宛にご一報くださいますようよろしくお願いいたします。

母校、宇都宮大学は、今年度から6番目の学部として“データサイエンス経営学部（学生定員55名）”が加わり、一段と教育研究分野が拡大されました。この中において、農学部は現状5学科（生物資源科学、応用生命化学、農業環境工学、農業経済学、森林科学）にて850余名（本年度の入学者数は214名）の学生が学んでいます。コロナ感染症の拡大も落ち着き、キャンパスには多くの学生の姿が見てとれます。地方国立大学法人の財政事情は大変厳しさを増しているようですが、これからも地域はもとより、国内、そして世界へと多くの知見を発信して行ってほしいと期待しています。



## 副会長挨拶

峰ヶ丘同窓会副会長

杉本 宏之 (昭59院畜卒)

「私でいいのか？」という自問はありつつ、この度副会長という要職に就かせていただくこととなりました。よろしくお願いいたします。

宇都宮大学農学部との付き合いは、昭和57年4月の大学院入学に始まります。

酪農という職業へのあこがれもあり、大学は帯広畜産大学に進んだのですが、家庭の事情で栃木に戻らざるを得ず、酪農とは直接関係のない職場に就職しました。

しかし、専門分野で生きていきたい、もう少し勉強をしたいという思いもあって、宇都宮大学の大学院に進学。家畜飼養学（久保先生）の研究室で、鶏糞を乾燥させることなく生糞のままどうやって熱量を測定するかというテーマに勤しみ(?)ました。正直なところもう少し現場に近い研究をしたかったのですが、他の院生のテーマを見ても、久保先生の研究志向は基礎的なところにあったような

気がします。

それから早40年以上が経過し、当時の先生方も多くは退官を迎え、これまで何人かの先生の最終講義を聞く機会がありましたが、私が在籍していた当時よりもさらに研究内容が高度化・専門化し、内容を理解できない自分に逆に驚きました。

「選択と集中」。国や地方の財政が厳しくなる中、大学も例外ではなく「競争的資金」の名の下で、現場に近い研究よりも“アカデミック”な研究を求められているのでしょうか。数年前のことです。知り合いがある大学の教員に採用されながら、半年もしないうちにやめてしまいました。本人は現場に近いところでの研究をしたかったのですが、採用後に、「もっと最先端の研究をなさい」と上層部から言われたことが辞めた理由の一つだそうです。

農学部の研究方針には「現場で役に立つ研究、地域社会に還元できる研究から世界最先端の研究まで、広範囲な課題に取り組んでいます。」とあります。「世界最先端の研究」も必要でしょう。しかし農業県である栃木県にあるからこそ「現場に役立つ研究、地域社会に還元できる研究」が宇都宮大学にはより求められるのかなと思っています。

農学部へのそんな期待を述べさせていただき、就任の挨拶とさせていただきます。